ヨークピア

編集・発行　公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）　発行日　2023年4月5日　266号

日本人 x 外国人　多文化共生のまちづくりを伝える

ヨークピア

266 号
2023 年 4 月



-Contets-

YOKE のこれまでとヨークピア
国際機関実務体験プログラム 2022 年度春期「私たちの 70 時間」
YOKE の職員に聞いてみました
横浜市多文化共生総合相談センター　相談の現場から
2 年目を迎えました「ウクライナ避難民支援」

公益財団法人 横浜市国際交流協会（YOKE）
〒220-0012　横浜市西区みなとみらい 1-1-1　パシフィコ横浜　横浜国際協力センター 5 階
TEL　045-222-1171（代表）　FAX　045-222-1187
E-mail　yoke@yoke.or.jp
URL　https://www.yokeweb.com

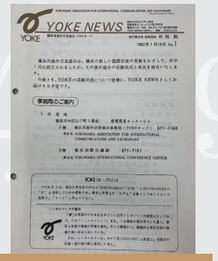
1982 → 2023 40年の時を経て…「YOKEのこれまでとヨークピア」

yoke

いつも「ヨークピア」をご覧いただき、ありがとうございます。ヨークピアは、1982 年 1 月に前身である「YOKE NEWS」創刊以降、時代の流れに応じて変化しながら発行を継続しています。そして、2022 年 1 月に 40 周年を迎えました。創刊号からその内容を辿って行くと、これまでの YOKE の歴史が見えてきます。今回は、ヨークピアのバックナンバー紹介とともに、YOKE の変遷を紹介していきたいと思います。過去の情報の中に、今だからこそ心に響く発見がたくさんあるかもしれません！

1982 「YOKE NEWS」創刊

当時の「任意団体横浜市海外交流協会」の広報紙として記念すべき第１号。記事内には「海外ジャーナリストからの提言―日本の国際化と横浜の役割」の開催報告が掲載されており、当時の日本で「国際化」の機運が高まっていたことがわかります。
あとがきでは、「まだ設立して間もない団体ですが、皆様のご支援によりユニークで活動的な団体として、育っていきたいと思います。よろしくお願いします。」という初々しいメッセージもありました。



記念すべき創刊号。「ヨークピア」の歴史はここから始まりました。

1983 「ヨークニュース」へ名称変更

財団法人の認可を得て、「財団法人横浜市海外交流協会」となってから間もなく発行された広報紙では、それまでの「YOKE NEWS」から「ヨークニュース」へタイトルを変更。創刊から 1 年経った当時、事業の数が増えていることもわかります。当時は交流が主な事業だったほか、国際会議場の運営や人形の家事業といった業務も行っていました。

姉妹都市交流等、世界の都市間の交流が最盛期に

横浜市では古くから世界の国々の都市との「姉妹都市連携」の取り組みが進められてきました。1983 年～ 1986 年の「ヨークニュース」ではこれらの姉妹都市の紹介や交流、各都市にちなんだフェスティバルの開催報告、海外の都市で開催されたフェスティバルへの参加に関する記事が多く見られます。日本から各都市への使節団派遣、または各国からの使節団や視察団、表敬訪問を目的とした要人の来浜の記録も多く掲載されています。1985 年からは、「市内のボランティア・グループ紹介」が始まっています。国際交流が市民のみなさんにも広がっていく様子が伝わってきます。グループの中には観光や仕事で来日した外国人のみなさんに「日本語を学んでもらおう」とする動きがみられ、後の在住外国人の日本語学習支援につながる活動であったと言えるかもしれません。



1986 「横浜国際交流ラウンジ」オープン、「青少年国際交流セミナー」開催 ～世界の人々を知る取り組みへ～

1986年10月には、「横浜国際交流ラウンジ情報コーナー」がオープンしました。日本人から「英語教師を紹介してほしい」「海外留学の情報が欲しい」、外国人市民から「日本文化を体験したい」「ホームステイをしたい」といった希望に対応していました。この取り組みは、後に「YOKE情報・相談コーナー」となり、現在の「横浜市多文化共生総合相談センター」につながっていきます。1987年、YOKEでは「青少年国際交流セミナー」が始まりました。これまでの国際交流から、海外の国（フィリピン、タイ、ベトナム）を訪れ現地の実情を知る、現在の多文化共生の取り組みの礎となる事業の始まりです。セミナーには当時の16歳から19歳の若者が参加し、YOKE職員が現地へ引率した記録が残っています。また、「留学生生活実態調査」の実施、留学生を支援するバザーの開催など日本で暮らす外国人に着目する動きが見られるようになってきます。これまでに行ってきた使節団派遣や使節団の受け入れはこの時期も続いており、YOKE事業の軸であることは変わっていません。

1988 国際化のシンボル「外国人よろず相談所」

1988年3月になると、横浜国際交流ラウンジ情報コーナーでの「外国人よろず相談所」での相談件数が1300件になった記事が見られます。相談対応者もブラジル、モロッコ。スリランカ、米国、スイス、フィリピン、日本、中国と多様で、現在の多言語対応と変わらない対応を行っていたことがわかります。「外国人よろず相談所」の相談対応件数を見ると、在住外国人の不安、心配事、戸惑いから服装や美容院など日常生活に関する質問もありました。



1993 鶴見区「外国人のための日常生活ガイド発行」

1990年の「出入国管理及び難民認定法」改正に伴い、在住外国人の数が増えた90年代。鶴見区では在住外国人が急増し、カードタイプの日常生活ガイドを発行したとの記事がありました。対応言語は、スペイン語、ポルトガル語、英語の3言語で、南米出身の在住者が多いことがわかります。1994年3月31日号では、「第4期サバイバル日本語教室」の開催報告記事があり、日本で暮らす外国人のニーズに応える企画が始まったことがわかります。

1994 名称が「ヨークピア」へ

1994年9月、「ヨークニュース」は「国際交流情報誌　ヨークピア」へと生まれ変わりました。これを機に、国際交流に関心を持つ方への情報提供ページが増えています。また、外国人労働問題に触れる記事も登場しています。エイズに関するワークショップも開催され、国際交流や異文化理解の企画に加え、課題解決を目的とした企画が増えています。編集後記では「このところの不況のお陰で、すっかり金利が下がってしまいました」との記載もあり、景気の後退が始まったことがわかります。1994年頃は、地域のボランティア団体へ「国際交流基金助成金」を交付する事業も始まり、地域での在住外国人支援が積極的に行われていました。



ヨークピアの由来（2000 年 9・10 月号）

国際交流情報誌ヨークピアは、読者と共に歩む、読者のための情報誌です。横浜港の大桟橋（＝PIER）のそばに事務所を構える当協会＊（＝YOKE）と国際ボランティア活動に取り組む市民グループ、仲間（＝PEER）が連携協力していきながら、明日の国際化を見つめ（＝PEER）横浜を国際文化都市の理想の地（＝UTOPIA）としようーの願いを込めて「ヨークピア YOKE PIER」と命名しました。
＊当時は山下町にある産業貿易センタービルに事務所がありました。

1997 多言語による情報ガイド「横浜・くらしの手帳」発行

この頃になると、さまざまなところから在住外国人向けの生活ガイドブックが発行されていたことがわかります。YOKEが発行した「横浜・くらしの手帳」は、国際交流ラウンジや市民ボランティアの協力によって作成されました。
出身国・地域によって必要とする情報が異なっていることを重視する、マークを使って視覚的にわかりやすくするなど、当時から一歩踏み込んだ形で編集されていました。9・10月号では、「急増する外国籍の子供たち」が巻頭の特集となっており、このころから子どもの日本語学習の重要性が指摘され始めました。この年、YOKEウェブサイトが開設され、インターネットによる情報発信が可能になりました。



1999 「横浜市国際交流協会」へ

「横浜市海外交流協会」から「横浜市国際交流協会」へ名称がかわりました。これからの目標として「世界に開かれた都市」を掲げています。また、地域での外国人との交流活動、外国人の暮らしやすいまちづくりなどが横浜市国際交流協会の仕事であることが宣言されており、現在のYOKEの事業の礎となっています。

2000 市民団体やボランティアの新しい取り組み

2000年になると、横浜市の在住外国人は50,000人を超えました。在住外国人が抱える課題も多様化し、市民団体やボランティアが従来の活動の見直し、新たな試みの模索をしていたことがわかります。YOKEでも団体との連携の重要性を伝えており、つながりづくりに力を入れていた様子が報告されています。かつて記事の主流であった国際交流に関する記事はなくなり、在住外国人に焦点を当てた記事が紙面の多くを占めるようになります。



2001 YOKEウェブサイトでアクセスが多いのは「横浜市内の国際交流イベント」

紙媒体が主流であったYOKEの広報でしたが、この頃になるとウェブサイトやメーリングリストといった電子媒体も軌道に乗り始めました。YOKEで作成した報告書等もウェブサイトで見ることができるようになりました。当時、YOKEのウェブサイトでよく見られていたのは「横浜市内の国際交流イベント」でした。インターネットなどの電子媒体を通した情報の伝え方について、YOKEの市内の国際交流ラウンジも模索していた様子が記事になっています。

2003 イベント情報掲載に特化した紙面構成へ

2003年9月号から、ヨークピアは研修会やイベント情報掲載を中心とした紙面に変わり、発行回数もこれまでの隔月発行から月刊になりました。巻末にYOKEの事業報告や当時の事務局長からのメッセージが掲載されています。YOKE、市内の国際交流ラウンジ・団体が開催する企画がぐっと増えてきたことがこの号でわかります。

2007 内部での印刷開始

これまで印刷会社へ発注していたヨークピアでしたが、内部スタッフによる編集、版下作成、リソグラフによる印刷へ発行方法が変わりました。掲載内容は、完全にYOKEと市内国際交流ラウンジ、団体が開催する研修会やイベント情報となっています。



2015 モノクロ印刷からカラー印刷へ 紙・ウェブサイトの利点を活かした情報発信

約9年間内部でのリソグラフで印刷からカラー印刷に変わりました。カラー印刷になることで読みやすく、画像も見やすくなりました。
文字での情報が中心であった構成から、各記事に特色を持たせ、目に留まりやすい編集を心がけるようにしました。この号を機に、ヨークピアに掲載する情報は必要最低限とし、関心がある情報はウェブサイトを見てもらうなど、各媒体の利点を活かす情報提供方法へ切り替えました。2012年12月から開始したYOKE facebookページのユーザー数も増え、YOKEの情報などを伝える有効な手段の1つに成長しました。



2020 ヨークピアは、私たちの「考え」「思い」を伝える広報紙へ

ヨークピアは、2003年から約17年間、YOKEや国際交流ラウンジ、団体が開催する研修会やイベント情報を伝えることに注力してきました。研修会やイベント情報のニーズは依然高く重要な情報ですが、私たちは企画開催に至った経緯やどのような考えや思いで事業を進めているかについて伝える機会がありませんでした。市民のみなさまに私たちの事業に理解いただくためには、私たちスタッフの考えや思いも伝えていくことが大切ではないかと思ったことを理由に、2020年8月から現在の形態でヨークピアを発行しています。

2023 これからも事業とスタッフの思いを伝え続けていきます

ヨークピアが現在の形態になってから3年目を迎えます。YOKEへ来訪された方へ事業について紹介する際にも活用されるようになりました。これからも口頭では伝えきれない事業内容や事業を担当するスタッフの考えや思いを伝える役割を担っていくことができればと思います。そして、一人でも多くの方にYOKEの事業を知っていただき、さらには共感いただくことができるよう、努めていきたいと思っています。



PC・スマホでの閲覧は「note」が便利です

2020 年 8 月以降の記事は、メディアプラットフォーム「note」にアップしています。パソコン、タブレット、スマートフォンから見ていただく場合は、こちらが便利です。ぜひご活用くださいますようお願いいたします。
https://note.com/yokeyokohama/

note

「YOKE からのお知らせ」にご登録ください

YOKE と市内国際交流ラウンジが開催する研修会やイベント情報を月２回メールで配信しています。各ラウンジでは、地域の特性に合わせた特色ある研修会やイベントを企画しています。これらの研修会やイベント参加に関心がある方はぜひご登録ください。
https://m.bmb.jp/bm/p/f/tf.php?id=yoke&task=regist

YOKE からのお知らせ



こまみや　たくみ
駒宮 拓海 さん
國學院大学 人間開発学部　初等教育学科４年

① 今までは、教員になるために学校現場で実習やボランティアを実施してきました。ですが、現在は、大学卒業後に大学院で学び、国際機関で働くことを目標としており、実務体験プログラムに関心を持ちました。

② 日本語教室運営者向け研修会です。リタイアされた方が地域のために活動されている姿に刺激を受けました。

③ 毎日楽しい日々を YOKEで過ごさせていただきました！さまざまなバックグラウンドを持つ方々と関わることが、自分にとって一番勉強になりました。各事業を通して、人と人のつながりに携われることにやりがいを感じており、外国につながる方々と有意義な時間を過ごせたことが嬉しかったです。また、YOKEの他にもいくつかの国際機関や団体の方々とお会いする機会もあり、自分のキャリア形成が幅広くなったと実感しています。

④ 大学2年時にガーナの小学校でボランティアをした経験から、途上国の人々の暮らしに貢献したいと考えています。国際機関で経験を積み、途上国のみならず世界の人々の役に立てるような人間になりたいです。

なるほど！



支援の現場をたくさん見学



① 私は、将来教員になることを目指しています。グローバル化に対応できる資質を身に付けるために、日本に暮らす外国人に対する理解を深めたいと考え、本プログラムに参加いたしました。

② 横浜市国際学生会館運営事業です。イベントや出前授業の補助を通して、留学生と会館スタッフと交流できました。

③ 多文化共生のために YOKEをはじめ、各ラウンジ、事業がさまざまな取り組みをしていることを知りました。共生を実現することの難しさを実感するとともに、外国につながる方とお話しできたことは大変貴重な経験となりました。私は、みなみ市民活動・多文化共生ラウンジとなか国際交流ラウンジの事業にも参加しました。そこで、ラウンジが各地域の特色を活かし、区民と外国につながる人々との架け橋的役割を担っていることを学びました。実務体験で得たことを将来に生かしたいです。

④ 今回の体験を、社会の変化にも対応できる柔軟な教員になるという目標につなげたいです。傾聴力・多文化理解力をもって、多文化共生への対応力を高められる集団作りをしたいと考えています。



にしざか　りいな
西坂 里衣那 さん
明治学院大学 文学部 英文学科２年

①国際機関実務体験プログラム参加を希望した理由
②国際機関実務体験プログラムで一番印象に残った事業　③実務体験の感想
④将来してみたいこと・夢
※在籍する大学、学部、学年は 2023 年３月現在の情報です。

インターンのみなさんに聞きました





国際機関実務体験プログラム
2022 年度春期

YOKEの“Y”でポーズ♪

私たちの 70 時間

2023 年２月から３月にかけて実施された「国際機関実務体験プログラム」に４名の学生が参加しました。YOKE の実務を体験する 70 時間の活動を通して感じたことなどを学生のみなさんから教えてもらいました。学生のみなさんが来られたことは、YOKE スタッフにとっても自身の業務を見つめ直す良い機会となりました。YOKE で見たこと聞いたこと、携わったことが学生のみなさんにとって有意義な体験であり、将来の夢に役立つものであることを願っています。

国際機関実務体験プログラム事業担当
松田から

コロナ禍により２年半にわたり中止となっていた本プログラムは、ようやく一部再開することができ、今回は４名の学生をお迎えしました。実習のテーマは、「自らの学びをデザインする」。各々の興味・関心に沿って自ら実習 70 時間を組み立て、積極的に各事業に携わっていただきました。さまざまな人に出会い、そこから得た多様な視点が、今後のみなさんの糧となることを願っています。




CITYNET 横浜プロジェクトオフィス


アメリカ・カナダ大学連合（IUC）日本研究センター

国際機関担当者から話を聞くことができました！


国際農業開発基金（IFAD）日本連絡事務所

横浜国際協力センターに入居する国際機関の取り組みについて話を聞きました。各機関の地球規模の取り組みについて知ることができました。

のぐち　みおん
野口 美音 さん
神奈川大学 国際日本学部　国際文化交流学科２年



実務体験プログラムの一環で、野口さんが本紙 5 ページの企画と取材、レイアウトを担当しました。ぜひご覧ください！

① 文化交流や多文化共生に関して興味があり、それらの興味関心を中心とした事業を YOKEが行っているため参加を希望しました。

② （ウクライナ交流カフェ）ドゥルーズィ日本語みらい教室の事業が一番印象に残りました。ウクライナ避難民の方々とお話しできました。

③ 横浜市が多文化共生に力を入れている都市だということを肌で実感しました。世界の複数の都市と姉妹・友好都市提携があり、市内に国際交流ラウンジが数多くある点で横浜市は多文化共生や国際協力に力を入れていると感じ、今まで住んできたこの横浜市に誇りを持ちました。実務体験プログラムを通して、地域的にも国際的にも貢献しているYOKEを深く知ることができました。このプログラムに参加できてよかったと心から感じています。

④ 一度日本を飛び出して海外に住んで働いてみたいです。自分が生まれ育った国だけでなく、広い視野で世界をみて、言語や文化から世界を知りたいです。

ふむふむ



外部研修会で外国人の視点でのアドバイスを伝えました



① 国際協力・国際交流のことをこれまで以上に理解し、自分の力で貢献できるようになりたいと思いました。また、実務体験プログラムを通じてグローバルな視点を育てるとともに、コミュニケーション能力と働く能力の向上につなげることを期待し、応募しました。

② 地域日本語教室運営者向け研修会

③ 在住外国人を対象とした日本語教室の補助を数回行いました。ウクライナ避難民対象の教室もありました。学習者の勉強意欲が高いことを感じて、私も一層やる気になりました。また、交流会、研修会を見学しました。活動中に見つけた課題を仲間とシェアして、互いにヒントをもらうことは、とても有意義な活動であると思います。多くの人が在住外国人のより良い生活のため、積極的に解決策を探していると感じました。私は外国人として、とてもありがたいと思いました。

④ 人と人が気楽に交流できるようになるため、人々の言葉の架け橋になりたいです。日本語が不自由なために交流ができないという課題を克服し、文化交流、ビジネスを行うことに自分の力をもって貢献したいと思います。

り　きんう
李 欣羽 さん
横浜国立大学　国際社会科学府　修士１年



国際機関実務体験プログラムについて

YOKE は、市内国際機関等及び市内６大学と連携し、国際機関等や YOKE での実務体験（インターンシップ）を通じ、国際協力や多文化共生のまちづくりなどについて学生に考える機会を提供しています。「誰もが安心して豊かに暮らすことのできる世界」を目指す若者の育成を図るプログラムです。横浜国際協力センターに入居する各国際機関で 70 時間～ 100 時間の実務を行います。

多様な業務に関わりを持つグローバル人材育成支援課の紙谷さん



所属課を超えて活躍中！

紙谷さんは、グローバル人材育成支援課では小学校などを訪問し、SDGs や国際協力の講義を出前授業として行っています。これに加えて、多文化共生推進課の業務として横浜に住む外国につながる人々を対象とした日本語教室やウクライナ避難民支援に携わっています。鶴見国際交流ラウンジでは、地域の日本語学習支援者を対象とした講座を担当しており、外に出る機会が多い印象です。

ＹＯＫＥの印象とやりがい・大切にしていること

これまでの経験を経て、現在 YOKE で勤務している紙谷さん。YOKE の印象について聞いたところ、それぞれの事業にスペシャリストがたくさんいることに驚いたとのことでした。また、ＹＯＫＥ職員数の何倍ものボランティアの人がいることにも驚き、その人たちもプロフェッショナルな人ばかりだと感じたそうです。YOKE に勤務していてやりがいを感じる場面は、「横浜市の中で少しでも笑顔が増えること」だと紙谷さんは言います。YOKＥを訪れた際、紙谷さんに声をかけた在住外国人・ウクライナ避難民みなさんの笑顔がみられるのも嬉しいと聞きました。外国人のみなさんにとって日本が外国なので、当然不安を感じています。外国人のみなさんへ日本について教えることも大切ですが、それよりも不安をなくすことが何よりも大切だと考えながら紙谷さんは日々業務にあたっています。



紙谷さんの楽しい工夫

紙谷さんはプライベートで外出する際、観光地の街中にある日本語を写真に撮っています。そして、日本語教室の授業で撮影した写真を外国人のみなさんに紹介しています。写真の具体例は、「右側を上ってください」「2 つで 20 パーセントオフ」や「J1 昇格」など紹介してきて、なかでも外国人の方のリアクションが良かった写真は、崎陽軒のお弁当を見せたときの「かまぼこ」でした。外国人はケーキのようなビジュアルに対してスイーツのように甘いのかと不思議そうにしたそうです。紙谷さんはまさかそんな風に思うのかと驚き、当たり前を疑うことが非常に大切だと感じていると教えてくれました。

グローバル人材育成支援課 紙谷　元己　さん に聞きました！

YOKE 国際機関実務体験プログラム 2022 年度春期に参加したインターン生のうち、神奈川大学国際日本学部国際文化交流学科の野口美音さんが、国際交流情報提供事業の業務に関心を持ってくれました。国際交流情報提供事業の業務の 1 つに、この「ヨークピア」の発行があります。ちょうど 266 号の記事を企画編集する時期だったため、野口さんに 1 ページの企画を担当いただきました。野口さんが自ら YOKE 職員に話を聞いて、その内容をまとめてくれました。レイアウト案も野口さんによるものです。ぜひ、ご覧ください！

国際機関実務体験プログラム インターン生　野口 美音が YOKE の職員に聞いてみました





情報発信に関する業務を担当する多文化共生推進課の由田さん



みんなでヒントを見つけたとき、事業に共感してもらえた時が嬉しい

多文化共生推進課に所属の由田さんは、在住外国人のみなさんにとって有益な情報発信や、広報媒体で YOKE についての情報を発信しています。YOKE は、横浜市の在住外国人と日本人がお互いに理解し合い、暮らしやすいまちになることを目指しています。しかし、さまざまな文化・言葉・考え方を持った人々がひとつの課題を一緒に解決しようとしたときに、いろいろな常識や考え方があるため、すぐにその答えを見つけることは難しいと由田さんは考えます。由田さんは、答えを出せない場面でボランティアのみなさんや外国人のみなさんと話し合い、解決につながるヒントを見つけることができたときが非常に嬉しいと話していました。また、そのヒントを広告媒体などで伝えた際に共感してもらえた時や、必要としている方の役に立つことができていると知ったときにやりがいを感じるそうです。

長年携わってくれた人々の思いを継ぎながら事業の形を変えていく

由田さんにとって印象に残っているエピソードを尋ねたところ、長く続いていた事業を終えるときのできごとが印象的だったそうです。20 年以上の歴史があった多言語情報「よこはま yokohama」は、YOKE スタッフと翻訳ボランティアの方々約 20 名作成に携わっていました。毎月 10 言語（ベトナム語とネパール語は隔月発行）A4 版 4 ページで横浜市の行政情報やイベント情報を紙媒体（途中からホームページでの PDF 発信に変更）で発信していました。長く続いた事業であったため、一部のボランティアさんから「そろそろこの担当から退こうかと思う」との声が聞こえてきたところではあったのですが、由田さんはボランティアみなさんの思いが詰まった歴史あるこの事業をやめることに非常に責任を感じました。現在は規模を縮小して多言語での情報発信を継続していますが、「よこはま yokohama」で尽力くださったみなさんの思いを継ぎ、より良い形で在住外国人のみなさんへ情報を届ける方法を日々模索しているそうです。

多文化共生推進課 由田　弘美　さん に聞きました！

横浜市多文化共生総合相談センター 相談の現場から

Q

小２の息子がいます。２年生から個別支援級に移って算数、国語の勉強をしていますが、 他の教科は普通級で受けています。でも、 息子に聞くと何も勉強していないと言います。

状況がわからないのでとても心配です。 明後日、 学校で面談があるので、 その前に子どもの様子を学校に聞いてもらえないでしょうか。（スペイン語での相談）



A

息子さんが小学校でちゃんと授業を受けているのかわからず、心配されているのですね。

横浜市には通訳ボランティア派遣制度があるのをご存知でしょうか。外国語を話せる市民ボランティアを市役所、区役所、市立学校などに派遣し、日本語が不自由な外国人の皆さんをサポートしています。申込みは学校がしますので、個人面談に通訳が必要な場合は、学校から横浜市国際交流協会、または最寄りの国際交流ラウンジに申込んでもらってください。

また普段の生活で相談したいことがあれば、横浜市多文化共生総合相談センター（045-222-1209）にお電話ください。相談員が多言語で対応します。

横浜市多文化共生総合相談センターでは、外国人のみなさんからの質問に 11 言語で対応しています。
お気軽にご連絡ください。　**電話 045-222-1209**

２年目を迎えました ウクライナ避難民支援

私たち YOKE が横浜市と連携して行っている「ウクライナ避難民支援」は、２年目を迎えました。ウクライナ避難民のみなさんは、横浜で生活基盤を築くために日々頑張られています。言葉や文化、生活環境の違いで戸惑うこともあるかもしれません。私たちは、避難民のみなさんが少しでも安心して横浜で暮らすことができるよう、横浜市や協力者のみなさんと共に支援を継続して参ります。そして、避難民のみなさんが祖国ウクライナに 1 日でも早く戻れる日を願っています。引き続き、多くの方からのご理解とご協力を賜ることができましたら幸いです。

ウクライナ避難民の方々の前向きな姿勢や力強い言葉に敬服する日々です。横浜のみなさんのご支援・ご声援のおかげで事業を継続することができております。誠にありがとうございます。
中間



ウクライナ交流カフェ　ドゥルーズィ
担当　中間（左）・オレーナ（右）

みなさんのおかげでウクライナカフェ「ドゥルーズィ」を運営することができています。心から感謝申し上げます。避難民は祖国からの避難を余儀なくされ、慣れない場所で生活しています。しかし、みなさんからのご支援に感謝し、日本の役に立ちたいという気持ちを全員が持っています。どうぞこれからもあたたかい応援をよろしくお願いします。
オレーナ



ウクライナ交流カフェ「ドゥルーズィ」では、避難民のみなさんを対象とした様々な企画が開催されています。
市民のみなさんと交流できる機会も設けていく予定です。
「横浜市ウクライナ避難民支援ウェブサイト」をご覧ください。
https://yokohamaukraine.com/

YOKE からのお知らせ



YOKE とその関連施設、横浜市国際交流ラウンジで開催する多文化共生に関する研修会やイベントの情報を月 2 回メールで配信しています。多文化共生や国際交流に関心をお持ちのみなさま、ぜひ登録ください！

多文化共生に関する研修会やイベント情報を
いちはやくお届けします！

登録 URL　https://m.bmb.jp/bm/p/f/tf.php?id=yoke&task=regist

寄付をいただきました

神奈川 SGG クラブ（KSGG）(会長 窪田眞様)

からご寄付をいただきました。
ありがとうございました。
寄付金は、ご指定いただきました事業に充当し、
有効に活用させていただきます。

Thank You